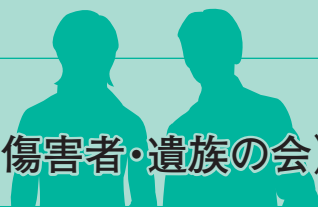




このひと

い が たか こ
伊賀 孝子さん

(大阪戦災傷害者・遺族の会)



「一人ひとりの人生の重みを伝えたい」

多くの人生を暗転させた大阪大空襲。13歳だった伊賀孝子さんの人生もまた大きく変わった。

空襲警報が鳴り響き始めた直後に油脂焼夷弾が自宅を直撃、防空壕で眠っていた伊賀さんや弟は一瞬にして火傷を負った。母親は即死だった。父親とともに命からがら叔父の家に避難したが、全身に火傷を負った弟は3日後に亡くなる。水を欲しがらぬ姉のために、力を振り絞って「おっちゃん!」と呼んでくれたのが最期の言葉だった。

「だけど母を亡くした寂しさを感じたり弟のことを考えられたりするようになったのは、戦争が終わってからです。傷の痛みや空襲警報でゆっくり物事を考える余裕などありませんでしたから」

終戦の日。神風が吹くはずの日本が負けたことに対するショックはなかった。真っ先に思ったのは、「今夜からゆっくり寝られる」ということである。けれども本当の苦しみが始まったのは、それからだった。

街頭に餓死した人の死体が無造作に転がっていた。食べていくために必死の人々は殺気立っていた。焼け跡での強盗や追いはぎ、闇物資のやりとりが原因のケンカ、そして街角に立つ少女……。

「私自身も母と弟を亡くした寂しさ、つらさに死にたいと思ったことがあります。でも包丁を手にとると2歳下の妹のことが気になる。妹がいたから思いとどまったようなものです」。伊賀さんも生きていくために無我夢中だった。「母を亡くして主婦代わりに働いていたから一人前のつもりでした。終戦直後のことを思い返したのは結婚してからです。あの頃、(売春のために)街角に立っていたのは自分と同年ぐらいの女の子だった、と。中学生ですよ」。「お茶の相手をするだけ」と言われて米兵相手のカフェで働き、深みにはまる女性も少なくなかった。父親が戦死し、残された弟妹たちを養うためには他に手段もなかった。「どこの国でも一緒です。女性が大変な苦勞をするのが戦争です」と、伊賀さんは語気を強める。

「涙で話せなくなるから…」と家族の間でも戦争の話はタブーだった。でも、行方不明者を含め1万5千人とされる死没者の一人ひとりに、それぞれの人生があり、生活の営みがあったという重みを知ってほしいという強い思いがあった。「生きていたという証には名前を残すしかない」と、大阪空襲の死没者名簿の作成を思い立ち、1983年から調査を始める。「大阪戦災傷害者・遺族の会」のメンバーとともに、お寺・霊園や慰霊碑を回って一人ひとりの名前を確認するという手探りの作業である。やがてマスコミに取り上げられると遺族からの電話が殺到した。時には何時間も話を聞き続ける。「“またその話か”と誰も聞いてくれない。伊賀さんに話して胸がスーッとしました」と言う人が少なくない。つらかったのは50音別で整理をしたため、苗字の違う家族は別々に掲載せざるを得なかったこと。「この期に及んで引き離すなんて」と、一度は名簿づくりを断念することすら考えた。

現在、死没者名簿の作成は(財)大阪国際平和センター(ピースおおさか)に引き継がれ、これまでに判明した約8千余人の名前が公開されている。平和への祈りをこめたモニュメント(大阪空襲死没者を追悼し平和を祈念する場)も8月に完成する。

「戦争体験をようやく振り返った時には30年が経っていました。自分の話を人前でできるようになったのも戦後35年めぐらいでした。一方で、忘れられるのは早い。“私の人生、何やったんやろう”と思うこともあります。生かされた者の義務としてできることはやらねばならないと思う一方で、残された時間を自分のためにも使いたいという思いもあるんです」。今では当たり前の「自分の人生を生きる」ことが、伊賀さんにとってはまぶしい。

戦争は、亡くなった人はもちろん、残された人にも人生の重みを考えさせる。